



通吟玉乃光

五  
保  
丁  
巳  
**42**

8  
3869  
92





通珍  
光

3869  
92

[Faint red stamp on a white paper tag]

3869  
92

3942  
26

室井平藏氏

このいん ちやうま さいしや  
這漏のまをそむ乃迄くを  
下づのいあふづらふ集申は  
句を覆てといあうもゆび草  
抄を違ぬひま祢曲のまね乃  
目見ハ犬傳のまをるる述まの  
編をよめて顔よ又張若者  
こゝ代燕嘆〜かむどまぐに  
著述しんを碎うまこまね  
了れよ〜海内は廣まりて今ハ  
九世同のま〜まふくもまふ

玉の今令く作者の勅る乃  
 仁義禮智孝悌忠信乃八顆  
 の玉は法よめやうとては冠弁  
 集もよくき世の人び子むぬの  
 風調よ叶いぬ人の多うも  
 不だ退くは編を改ぐむん  
 事を経うも予ぐを法る  
 為ふたはくは林の多ゆ乃  
 孝後を改くは乃は漢義を

後いて今う結よ外持ひ乃  
 書は志田氏と浪花よわつ  
 うは八丈竹茂寛のりくむを  
 とつひ又名の群玉堂とつひ  
 こもは八行の珠よゆうめ  
 号をねど世まうお園よおし  
 ようそがくはるがけつ  
 ありしをい

新時文好千子の勅夏上院

竹憲若笛撰

題目録

ついでして 十一 いそいで

一 十一 一 十一 一 十一

いそいで 十一 いそいで 十一

入 十一 石 十一

井 十一 ろく 十一

ろん 十一 ろん 十一

樽 十一 ん 十一

花乃 十一 ん 十一

子 十一 ん 十一

ろ 十一 ん 十一

泉 十一 ん 十一

花 十一 ん 十一

う 十一 ん 十一

み 十一 ん 十一

かん 十一 ん 十一

本 十一 ん 十一

だ 十一 ん 十一

ほ 十一 ん 十一

ほ 十一 ん 十一

ほ 十一 ん 十一

ほろがめ 居さくそで

づほくめ十九丁 へさく八樹八樹

とんくろく ちくぐ仕仕

とんくろく ちくぐ仕仕

戸あひをひく二十丁 通さんさん

とほをひくとほ 毒どく冷れい命めい四し

とんくろく ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

ちくぐ仕仕 ちくぐ仕仕

おしよせ

おんよせ

かきあ

かきい 五六丁

おしよ

おしよ

おけ

おけ 五七丁

まひ

まひ

まひ

まひ

かき

かき

傘ひろげ

かき 五八丁

かき

かき

かき

かき

かき 五九丁

かき

かき

かき

かき

かき 三三丁

かき

かき

かん

かん

かん

かん

かん

かん

かん

かん

かん

かん 五二丁

かん

かん





ねろくさひ 移むささく

急カタ乾カさし 中ミがよみ

中ナよ一ヒさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

中ナふさくさく 中ナふさくさく

うさやの

おきんツク早キ

乃ノづヅくクうウ

のノいイけケて

おオうウやヤまマぬヌ

乃ノいイけケて

のノいイひヒまマぬヌ

いイあアつツてテ 四シ一イチ八ハチ

えエいイづヅいイけケ

えエいイづヅいイけケ

親オヤ世セあアんン

車クルマよヨ乃ノせセ

えエいイづヅいイけケのノせセ

えエいイづヅいイけケのノせセ

君キミ子コのノいイづヅいイけケ

えエいイづヅいイけケのノせセ

えエいイづヅいイけケのノせセ

えエいイづヅいイけケのノせセ

世ヨのノいイづヅいイけケのノせセ

えエいイづヅいイけケのノせセ

えエいイづヅいイけケのノせセ 五イチ十ジュウ 矢ヤのノはハいイ

山ヤマいイづヅいイけケ

山ヤマいイづヅいイけケ

山ヤマいイづヅいイけケ

山ヤマいイづヅいイけケ

山ヤマいイづヅいイけケ

山ヤマいイづヅいイけケ

やヤれレくクせセまマぬヌのノいイづヅいイけケ

まマんンいイづヅいイけケ

まマんンいイづヅいイけケ

まマんンいイづヅいイけケ 五イチ十ジュウ 又マタいイづヅいイけケ

又マタいイづヅいイけケ

又マタいイづヅいイけケ

まマんンいイづヅいイけケ

まマんンいイづヅいイけケ

まマんンいイづヅいイけケ 五イチ十ジュウ 九クいイづヅいイけケ

五イチ十ジュウ 八ハチ

まらめさるい

源氏と平家

まらめさるい

毛がさるい

ふらさるい

ふらさるい 五十四

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい 五十五

ふらさるい

ふらさるい

五風十雨

コリヤさるい

ふらさるい

ふらさるい 五十六

ふらさるい

ふらさるい

極天よ

極天よ

ふらさるい

ふらさるい 五十七

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい 五十八

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい 五十九

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい

ふらさるい

らつりて

らつりて 六十一

まのしんり

まのしんり

らりり

らんり

らりり

らりり 六十二

らりり

らりり

らりり

らりり 六十三

らりり

らりり

らりり

らりり

らりり

らりり 六十三

らりり

らりり

らりり

らりり

らりり

らりり

らりり 六十四

らりり

らりり

らりり

らりり 六十五

らりり

らりり

らりり

らりり 六十六

らりり

らりり

らりり

らりり

らりり

らりり 六十七

まゆつしん せんせうよ

しんもつち せんせうよ

まゆつしん せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

ひろ せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

せんせうよ せんせうよ

Handwritten mark

系のほり

目録終

*[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive style]*

冠階玉光



戲坊芦笛選

たづね

差是るはゆきやうきき  
海むとろくハ本あさか  
招き人理る化粧紙  
栗ハ之乃子へあ  
空取山の飛車捨い  
いそくと  
そらそらそらそら

宿と下見下人傍と

一文三郎也

牛乃養を籠よ入と

櫓右を又々ゆると

くきづ子

船屋の帳又去と

舟をぬきとや来てを

曰あり

たるとお写乃彼人舞

苗時の所とやとい

いも助で

一兩乃傘はとよま

月およぬぐととい

入まぬぬ

蓋の志と方もか子連と

連中おととてすり

石と

も一交大戸とて

畑へおとぬぬ

おととらおととの

井ノ入

八百八丁<sup>ヤ</sup>宿<sup>リ</sup>宿<sup>リ</sup>宿<sup>リ</sup>宿<sup>リ</sup>宿<sup>リ</sup>

介<sup>ハ</sup>下<sup>ノ</sup>堀<sup>ノ</sup>土<sup>ノ</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>

千<sup>ノ</sup>日<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>多<sup>ク</sup>

ろ<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>ろ<sup>ろ</sup>

り<sup>り</sup>り<sup>り</sup>り<sup>り</sup>り<sup>り</sup>り<sup>り</sup>

子<sup>子</sup>子<sup>子</sup>子<sup>子</sup>子<sup>子</sup>子<sup>子</sup>

論<sup>論</sup>論<sup>論</sup>論<sup>論</sup>論<sup>論</sup>論<sup>論</sup>

布<sup>布</sup>布<sup>布</sup>布<sup>布</sup>布<sup>布</sup>布<sup>布</sup>

次<sup>次</sup>次<sup>次</sup>次<sup>次</sup>次<sup>次</sup>次<sup>次</sup>

長<sup>長</sup>長<sup>長</sup>長<sup>長</sup>長<sup>長</sup>長<sup>長</sup>

月<sup>月</sup>月<sup>月</sup>月<sup>月</sup>月<sup>月</sup>月<sup>月</sup>

樽<sup>樽</sup>樽<sup>樽</sup>樽<sup>樽</sup>樽<sup>樽</sup>樽<sup>樽</sup>

ち<sup>ち</sup>ち<sup>ち</sup>ち<sup>ち</sup>ち<sup>ち</sup>ち<sup>ち</sup>

舞<sup>舞</sup>舞<sup>舞</sup>舞<sup>舞</sup>舞<sup>舞</sup>舞<sup>舞</sup>

キ<sup>キ</sup>キ<sup>キ</sup>キ<sup>キ</sup>キ<sup>キ</sup>キ<sup>キ</sup>

コ<sup>コ</sup>コ<sup>コ</sup>コ<sup>コ</sup>コ<sup>コ</sup>コ<sup>コ</sup>

小<sup>小</sup>小<sup>小</sup>小<sup>小</sup>小<sup>小</sup>小<sup>小</sup>

位<sup>位</sup>位<sup>位</sup>位<sup>位</sup>位<sup>位</sup>位<sup>位</sup>

も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>

や<sup>や</sup>や<sup>や</sup>や<sup>や</sup>や<sup>や</sup>や<sup>や</sup>



張りしを又とりぬる

花の匂て

次乃主人を川舟にり  
借家の屋根もはがら肉

とらまえて

今船は一生酒乃すん  
燐を百目づ並べ

船は舟に程居て是こ  
そトハあんやう殺生トや

身てあやうは體を賣

子投

おま飯うまの味  
一文横ばうを移し

とらまえて

四月より治を産酒を  
大坂へ飯をたす

且那酒代ではす  
あはれそそのりて

あはれそそのりて

馬うまをかくしの

焼耐やきどやテ酒どやぶか

結むす梅うめさらぬも花はなぶあふ

さはのへとさひく狐きつね

田い系けい粉こなよこ二に階かいりう

法はふく移るく屋やをむきび智ち

こうてめんような

こもたまをとれて手てづゆん

鼻はなをかく

一い日にち子こをかねて紙かみをかく

こうてめんような

ぬくさぬ袖そでをかけぬ

勝かち負まハ中入いるまをかく

著あるまをかくまをかく

花はなハスるな

夕ゆふアらうたははははをかく

取とりかけぬまをかく

いの文ふみをかくまをかく

袴はかまをかく

足あしをかくまをかく

賑なげくく

翁おきなより来たれたりきき

あ〜〜〜

奈良な給乃たま帆ほをを尾おきけ

結ゆひひああささそそそそいい

あ〜〜〜

銀ぎん葉はのの中ちゆうににああままふふ

うう〜〜やや初はつ子こ〜〜梅うめがが母ははと

それハ子こののををいいううたたららうう

二ふた交まじりりけけ

浅あ籠かご精せい〜〜〜〜ををああいい

とと東あづまううややここらら〜〜〜〜深ふかくくやや〜

別わかれれ〜〜〜〜乃のらら〜〜〜〜別わかれれ〜

あ〜〜〜

折お角かくとと〜〜〜〜銀ぎん葉は〜〜

之この日ひ月つきええんん〜〜ああそそううら

あ〜〜〜

今いまんんももままいいぬぬややううふふ迹あとけけ

あ〜〜〜

花はな分ぶん買かうう〜〜〜〜繪えのの日ひ

八まんゆめで昭がしる

本懐

聖ふむ道乃透るひく

内まぐすくきく掛い

ふんげうた

振つてまおてでくを

ほらと一息

四と年詠くく又巻く

あそめくくくあそを越く

おしひのふ乃おんまづめ

信きもあふいご又あふい

頬うらうら

暖くもかき控て下

素くは法利一く

がらうら

あつて赤手ぬぐいご捨入皮

下よのらやット取入まうら

ほらうら

夢乃まふまへくく付

下し座あておんまうら

○十九

肩<sup>こ</sup>づけ<sup>け</sup>〜〜<sup>〜</sup> 擦<sup>こ</sup>く<sup>く</sup>入<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>  
髪<sup>かみ</sup>乃<sup>の</sup>〜〜<sup>〜</sup> け<sup>け</sup>〜<sup>〜</sup> 今<sup>いま</sup>

善<sup>ぜん</sup>提<sup>だい</sup>の<sup>の</sup>為<sup>ため</sup>

一<sup>い</sup>口<sup>くち</sup>丹<sup>たん</sup>布<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>液<sup>えき</sup>汁<sup>じゆ</sup>吸<sup>す</sup>つ

あ<sup>あ</sup>〜<sup>〜</sup> ぬ<sup>ぬ</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>引<sup>ひ</sup>ら<sup>ら</sup>〜

秘<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>つ<sup>つ</sup>

も<sup>も</sup>一<sup>い</sup>筋<sup>ぢん</sup>を<sup>を</sup>ふ<sup>ふ</sup>〜

あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>〜<sup>〜</sup> せ<sup>せ</sup>〜<sup>〜</sup> ぬ

長<sup>なが</sup>の<sup>の</sup>〜

ほ<sup>ほ</sup>〜<sup>〜</sup> 音<sup>ね</sup>〜

十<sup>じゅう</sup>本<sup>ほん</sup>を<sup>を</sup>〜

あ<sup>あ</sup>〜<sup>〜</sup> ぬ

〜

擦<sup>こ</sup>〜<sup>〜</sup> ぬ

〜

あ<sup>あ</sup>〜<sup>〜</sup> ぬ

〜

〜

道<sup>みち</sup>を<sup>を</sup>造<sup>つく</sup>つて<sup>て</sup> 歩<sup>あゆ</sup>む

玉<sup>たま</sup>乃<sup>の</sup>光<sup>ひかり</sup>

○十九

うづうとくまふたをまうし

月つき神かみくせんぶつをもち用もちひ

ゆづるまるとまると山やまはあま

とぶく仕しあつせ

鼻はな乃のよむをあひまよる

どんと居ゐる

口くち傘さ園えん乃のうらうら

一ひと船ふねこゝろおとまらん

角かく力りきのあけあくくるる身み系けい

戸とをあけ

今いまおらうまけをあくくい

もろしやあをあ指さめめあ

よよ一ひと路ぢののままももささりりい

通とほえんえんららうう

脊せき切きちちららうう強つよががああうう

女にょ人にん堂どうううおおいいううらら

為な給たまふふままををほほくく

去い佐さ跡あとしし

文ぶん庫こやや机つくえととののままいい

毒喰や四

あつらひくさい着衣を  
初衣よんご破れぬふいふ

どふを仕

世中を竹の皮が鳴る  
え壺のふねの浅くぬ  
がんふを穿中つる  
撥櫃をよぎ廻ほり

ちくちくと

きん産乃秘し人能く

七ツ窓の眼鳴りや

ちくちくと待チ

肩の白糸吟を仕

一チ扱人さいで押サ

ちくちくと

学部と身ど何と

奥乃環まをさうつ

ちくちくと

ゆらめくまをぬ

ゆよべの風呂がぬ

ちよこ女か

下<sup>ぎ</sup>八<sup>は</sup>倍<sup>ばい</sup>て<sup>て</sup>是<sup>こ</sup>こ<sup>や</sup>う<sup>か</sup>

ちよこ女

且<sup>ぬ</sup>那<sup>ぬ</sup>う<sup>ぬ</sup>ん<sup>ぬ</sup>犬<sup>ぬ</sup>が<sup>ぬ</sup>在<sup>ぬ</sup>る<sup>ぬ</sup>を<sup>ぬ</sup>い<sup>ぬ</sup>

中途<sup>ちゆうと</sup>

伏<sup>ふ</sup>又<sup>ふ</sup>で<sup>ふ</sup>糸<sup>ふ</sup>乃<sup>ふ</sup>糸<sup>ふ</sup>止<sup>ふ</sup>

持<sup>も</sup>た<sup>も</sup>り<sup>も</sup>す<sup>も</sup>が<sup>も</sup>不<sup>も</sup>持<sup>も</sup>す

中<sup>ちゆう</sup>ウ<sup>ウ</sup>流<sup>りゆう</sup>ま

証<sup>しやう</sup>の<sup>の</sup>法<sup>ぽう</sup>を<sup>を</sup>不<sup>ふ</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>う<sup>う</sup>は<sup>は</sup>証<sup>しやう</sup>解<sup>かい</sup>も

年<sup>ねん</sup>所<sup>しよ</sup>節<sup>せつ</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>う<sup>う</sup>け<sup>け</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>

年<sup>ねん</sup>よ<sup>よ</sup>一<sup>いっ</sup>十<sup>じゆ</sup>な<sup>な</sup>ハ<sup>ハ</sup>浅<sup>せん</sup>ソ<sup>ソ</sup>ゲ<sup>ゲ</sup>を

将<sup>しやう</sup>々<sup>々</sup>禪<sup>ぜん</sup>う<sup>う</sup>消<sup>しょう</sup>え<sup>え</sup>ぬ

糸<sup>いと</sup>み<sup>み</sup>を<sup>を</sup>車<sup>くるま</sup>家<sup>か</sup>へ<sup>へ</sup>通<sup>と</sup>い

ちよこ女か

衣<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>そ<sup>そ</sup>め<sup>め</sup>雨<sup>あめ</sup>も<sup>も</sup>け

軟<sup>なん</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>い<sup>い</sup>め<sup>め</sup>や<sup>や</sup>持<sup>も</sup>て<sup>て</sup>お<sup>お</sup>い<sup>い</sup>ん

かきこらひ

擲<sup>てき</sup>ふ<sup>ふ</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>糸<sup>いと</sup>が<sup>が</sup>結<sup>むす</sup>

之<sup>こ</sup>さい<sup>さい</sup>半<sup>はん</sup>切<sup>きり</sup>ス<sup>ス</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>

け<sup>け</sup>が<sup>が</sup>纏<sup>まと</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ば<sup>ば</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>し



カキガカリ

かかろふもよみまはれす

暑うも大工ハ汗をうぬ

一ト筋もねハそでしき

利を垂ぎり

まろしや外へ入しき

ゆりゆり

南天のまふも汗をうぬ

喉もあとの頭痛喰い

まろしきも喰くぬあど

金串きりきり

油ぎけり小提出

ゆりと文物

眉毛おしそ袖を捲き

おしきもまぬ喰い

糖下釘

言もまはしきあそび

はしきで年本槿

新々

色紙の溜り

山崎



花におぼげり 雲よきら

おゆる〜どや

アノ人のアレ 呼ぶ〜

そ〜の 胡蘿蔔 娘〜

牡丹 絳乃 上 乙 崎 ぬり

どげ ちん 海山 上 子

キ 唇 巾 の

莖 菜 いたん こん げ 糸

起て ぬき

新 煙 の 向 け 鬼 女 の 面

ほい 一ト 足と ちよ たん ぼ

おえ 今 也

てア〜 柳へ 上 子 乙 子

茶 屋 が 酒 屋 ぬ け ち ぬ

おのれ 一 毒

かろ〜 世 々 や ち ち ち ち

こん どん 天 香 び ち ち ち ち ち ち

お〜 ち ち

一口も 納 ぐ ち ち ち ち ち ち

向 だ 八 収 が や ち ち ち ち ち ち

山 光

一ト並びて胡麻をみる

アノナアおまののナア

六字半分くらやいそぬ

お拂のそんるるたたら

君よきせ

おきる花菜摺るまがらう

かふくくくく津渡

どろでろくろも百とせ

返る人あは

る龍伏せと俣りどろ

とくまぬ様よ艾るせ

あつたろくろよかろん

とよど仕舞よ釣るけ

ろんごおまろ鬼よなま

押柄とさん

ヤイそんろくろぬさん

会つろばえ料はらけぬ

おりの通るぞ

拂入見料がわろよん

音がまろ

娘さんの名どや呼ぶてん

挿りつて

鼻花洋のまき路どや

おま乃おうハミでなまや

お鼻しふくらんで泣くまや

お鼻垢仲指はきまよる

えん中の縁つこり物

あく水各一かかると

移るよんときくくちや

川堰のよりまき

新しき新し

尾上り風を新

しんかい

除くまけまよる

おりらつりまき

まよるやまぬ

登のくいどらおまや

おまよるまよる

まよるまよる

蛇足布まき目利

光

かざりて

ゆふ飯そそく時分人

かざりて

赤乃けのふ子が一子

らうしんねの線帽子

風吹

横川へと流まはせ

森うほほ物そりい

傘度

又近よる

刷毛持もて病敷

切盤のう船繋ぎ

うそおやうぬもさう

脊が低けどよおね

若戎うし郎衆内

えそしん中で

かきものび

まじがたみるあう

糸捲く羊羹がう

えそ人煙管をう



勝て兒

夫は吸物をど吸いよ

かろくいな

氣よつやうよつや

長い戒名をいゆ

一投乃紙筋

つちを

うづ

年月がくま

流を

つち

あすの

おすの家

ららの

渡

合紋

あな

かろくいな

牛の

毎の



布子ぐもく了致悔はるる

かんざ梅

蝶々をまゆへ船さねるよ

はが鳴る

炮録のかをぬぐであ

口のうらぐぐはがさけ

こけうとらうと喰へぬ

むくさねの汁四、函ま

関飛あんらうよまぶ

かんざり

大いんぐぞ大をゆい

今朝うらうきまど濡ん

路次下駄を擔桶踏てる

上ミ下モで

山ろくを船でるせ

おそぐぬ園一やよかま

お鼻こは忍お痛いた

どやまねく俵四十支

風そつ

表明の速い梅よ鳴る

合点のゆゑ

花車をわらふの嬉し〜いぞ

いふは筆ふ〜を巻ひ

筆冴士乃山よ生へ

感ん〜

琴を並ぐ〜桑座 出

とら〜んで

紋のか括で細〜どや

懐い〜

なん〜と名どや括〜せ山

戀くを命法

泣が〜してゆ〜まはら

味よ来〜

折角よ〜ス〜〜をい

泣〜〜歌う〜まはらど

よ〜れた〜

足智が〜げ〜や〜うな

横櫃さ〜げて

喰〜〜め〜〜ま〜〜

あ〜〜〜枚の阪を乃せ

嫁入し

日傘へさしつくとさか

よめさし

海うき馬いしをも上げ

よめさし

糸をお波よ動かし

血、並ごとく水をうら

白いけりうとやをうら

肉でいざんをうら

魚ハ餅のあつ汁よ付

油のたつとに驚く

翅板割くやもふん

本層を蓮よしを

沁みる注連縄が一人

禪ち乃鳥が通る

蓼ちの虫も

挽白羅ふしを肉を

丸三

丸三

丸三

（一）

大音

中隠居さん市鑑

一子屋や二交でさくものう

玉ころくゝ家内

丸よりの字乃ぶら提

なやのうらうらう送

ふんぐり鹿の草逆

大いハ友

孫よやうハ年がやう

ふをかんづんも向う

文喜

うづまろ存く念

おろぬ卵をらんぐに

たのしみ

一里塚までゆびをく

有財縁免等の佃ウめが

竹を割て

後よあふても一ト通

おふのりくく

玉乃光 九四

をばよきぬ

馬の脊をけぬをよきぬ

もつてよみつと後がな

細切しとらうて挿

今より編じやうらひ

燈籠の灯をよきぬ

禪をよきぬ

舟人のたぬ楫をよきぬ

四毛人さんぐ片舟をよきぬ

次はゆるいほいす

起てうきくきをよきぬ

皇持や鐸のなるが集

初はゆるいほいす

おのいの背をよきぬ

大板場をよきぬ

唯一騎

百文新編で挿し

えんといふがねをよきぬ

きりやんをよきぬ

町内土儀切よきい

只とうし

習ふ銘屋が舟をまき

今近千と名寄るい

只でも否や

地合も地合は柄ラゴ

障子小使し仕立

礼よて

桶よ一わ再はき

内の様子を入

後美を画

くくくくくの大まじや

倒のおいで

親ゆいひしてフウ是

七日仕立やとせりん

子第して

残るおもはきとる

酒よ吞まされておや

そんく

きくわるるでとるん

乳ちぐらうてんやらすめ

そしとるらう

わらいしやとしん  
程ほどうし火い津づをぞぐら

此こらうのうらう

かさ鏡かがみらう入いまてらうらう

おまあさまの舟ふねをわせんの

小こさいしめを枝くれ

とらうの中ちゆうくわしゆよれ

うんをらいしのうらうをせん

とそい勢とんとんとん

火ひ津づのうでそをゆらふ

そしとるらう

向むかい津くまのうらう

山やま葵あひ入いまてらうのんらう

手てと振らうやがをさしまふ

船ふねをさらん川がわを越えし

流ながりてまるらう

せんらう家根ねのうらうとん

分わ洞どう内うちのうらうとん

酒の道のは 観音  
夜中よ 夢を せんを 起し

せんを 起し

何時間 ありし ころ

おし 菊の 煙管を せんを

せんを 起し

せんを 起し せんを 起し

せんを 起し

せんを 起し せんを 起し

せんを 起し せんを 起し

せんを 起し

せんを 起し せんを 起し

せんを 起し

せんを 起し せんを 起し

せんを 起し

せんを 起し せんを 起し

せんを 起し せんを 起し

せんを 起し せんを 起し

せんを 起し せんを 起し

せんを 起し



オイ正米のお書ん

樹浩で種片男捨ん

動氣とくれ

入丹ごけを旋うふ書キ

片まがと来

棟尾一扱めえ

付ヶ出んで

洗うぬ草をとうけ

片まがと来

級粒ふんど思くや

急よ移んへき

地獄の首をけく不買

首をとも取う四つも

採りてい

サア〜〜留ようんで

採りてい

〜や〜を〜しておやん

あ〜で〜が〜

急取けい

〜も〜も〜

おの

九

中がよ

月口の園うらうら  
かきだの櫛越あつせ  
内もこ人も新くし  
あつた時分かゝ懸うに  
乃の子りんすお妹之

中よ一際

うづうと起よ名ハまぬ

中よ一際

輪のぐるぐると足をはく

茄子一ト切ま練しやせぬ

長くし

五洗淨を賣あけく

とやげ一本川うさげ

流るる屋はくろろ流るる

卯月八日は鐘が

ゆよだの森を笑うねら

長尾で

子やぐいさやて偶よえ

子履のさつひ遠感

くさくさ 九合抄 九合抄 九合抄  
九合抄 九合抄 九合抄  
九合抄 九合抄 九合抄

なんごのり

けりもろもろ けりもろもろ  
けりもろもろ けりもろもろ  
けりもろもろ けりもろもろ

なれこ

なれこ なれこ なれこ  
なれこ なれこ なれこ  
なれこ なれこ なれこ

なれこ なれこ なれこ  
なれこ なれこ なれこ  
なれこ なれこ なれこ

なれこ なれこ なれこ  
なれこ なれこ なれこ  
なれこ なれこ なれこ

なれこ なれこ なれこ  
なれこ なれこ なれこ  
なれこ なれこ なれこ

なれこ

なれこ なれこ なれこ  
なれこ なれこ なれこ  
なれこ なれこ なれこ

なんごのり

なんごのり なんごのり  
なんごのり なんごのり  
なんごのり なんごのり

なんごのり なんごのり  
なんごのり なんごのり  
なんごのり なんごのり

なんごのり

なんごのり なんごのり  
なんごのり なんごのり  
なんごのり なんごのり

琴をひく樹ハ娘ごう

真知起

こめ乃汁は今もほりし

物表おつてあつて子三郎

孤袋はくく茶漬喰ひ

海うしやを吓え

一口お飯持くまあ

之月キ十日乃箱

鳴子クロ

つらつらいりメ

一尋の家おて

なつて

冷素顔く原が

おせんといひこの

いめん屋さん

なむあ

人待しうそ

夫生を

ハ子集乃船

ら

是も娘をきくしげ

らくらくで

かき手拭を俵にあら

子津の糸乃きつし

来奉ハ

あもふしききもび

あふらんふしきをき

解ぐ糸をうけてえ

蠟燭燭

てア持てきよ道がき

あふふしききもび

あふらんふしきをき

あふふ

今ね喰ふ糸をき

生糸入りしききも

あふらんふしきをき

糸屋糸を賣け

糸言糸ふしききも

糸子梳の蓋ゆきをき

きくしおりの糸刻して

すけりあき又買うといふ  
小そぞろちいしうきうき

母利言しい

りんまやけいよふーい

むらんこよ

菜種が咲てあゝのんよ  
あそびいふいふさあふ

虫糸をー

糖のちぬやうよ依依い  
舟乃言彦らるくけ

夕いも袖の内がけ

橋法へ小便しと斗を

深使と何とまけを

まこびもあり新もろ

こいつらおちつし仕

無程ちん

安公乃後後根をかみ

むつし

蛤けハ海乃汁

こね地合うどふん

〇〇〇

むくへ日士

横はくろつてきぬあふ

無きく

去用くはくはきん

かうの止るくあさく

一丈の布 四十丈

法をい

こをひよをを

一つの縁上を

あつても一

そんらん

らん

く

き

うけふ

五條の橋が

餅屋

魚と水

ハの仕

新く

うらうらう

石とが終までうらうらう

ヤイ〜うらうらうはあつらひのんじや

五十之次やうとさうけ

きねんかけの松とやうか

梅の園て

葱きげんでとへるま

送りもゆいし歯痛の

浮世を控

柳がら〜と綿とあ

猿丸をまくら権法師

清合

舟の底まで黒赤い

ふりふりきげとさうせん

運と向い

白い木のまうらね珠つる

〜張

神の棚までやうが

西笑のうらうらうが

りふふふふふふふ



うはく三々百

穠まなうまご行ぐさく

うらうらうらおそじやふ

まきうんやのはは

うらうらの

うんごを男くうまれうい

歯めけうらうてはなごん

うりらじやうたうやせぬ

あの方のり那 一筋て

たうらうてんがうらうら

あうれをま様子トやア

春すんハ

樹ごまうけー花ヶ咲

うらうら縁なう遠入

いてわうかまうんうい

長閑なう

この月佳のほよまうら

うらうら風呂あうあう

あうあううらうら

あうあううらうら

髪斗はく

ツイか寝いでうらうら  
根料にて式朱の扱  
りふ約束さるる母を

おぐやせぬ

お清さんの通るはきご

乃らつて

屋も尾のうで壺ま  
度こまかぬう体

のついで

鼻は二百ちてやせぬ

にぬい

智方ちのあははどし歯

うらわど控ぐりす

かつち一舌を巻く

喰つて

ちんちんお茶を淹つた

一ツ金んごは

観念

チニアボキヤアア

銀母音

泣くせんごうよ

皆かきくつ法どやがふ

度掃んこゝろえせ

車よりせ

畑の松が足おこる

うつくろせ

為し嘆であつるのう

土瓶とけしおてまて

汗をかくついで

アリヤ河六子あま

晴つて

右手のうよ木の原

隣の内にへて

君子のついで

アツくお車をくま

うつくろせ

うつくろせ

ひなを水浴びよせ

うつくろせ

祖上ゲヤ

舞々々々々々々々々々々々

まよまよまよまよまよまよ

楊枝

舞の舞々々々々々々々々々

送て送れ送れ送れ送れ

苔のふか

うれ是に十で百あつと

舞林ハ舞先を舞

~~~~~

舞々々々々々々々々々々々

家内安全銀子ほ

舞つ

一人よまよまよまよ

まよまよまよまよまよ

矢の使

ドレのまが往て又往

まよまよまよまよまよ

山吹

まよまよまよまよまよ

山ハ...

山ハまき

あつらふらふあめぞうの浪れ

山ハまき

はれの横樵四、まきせ

山のあま

新築の徳

はまき

山ハまき

空の涙乃るまの泡

大和

母者人咽々喝いぬ

うらうらまき

あつらふらふあめぞう

あま

子猫大和つをせけ

あま

何ぞん茶

虎よなうらまの

皆拙行が破

近江の母

近江の母者人を捕

者馬筆でん字がかけぬ

押んど紙の溝さく

おろイ志しと福柳

禪や何乃あまかく

又へことつさけどいそら

まんハよ

くあか手紙上げる

精進がよいそらんまもの

待まけ

汁のほろろと福をこく

うたえくおんを去靴

踏まうけと綱さく

又ツカ

今おろく急おろそニツ

きれいもくも割る

アノ長原少や

又か

美子を茶中

松の信を

中々とちりもが二ツ信を

まじつとくしつとく

うんハ液汁でまじや喰ぬ

執次石破籠よ彫り

夏更し

新竈を焼くうけ

眉をハの字

おまつる詮も町屋

長町をわづ我

まつり

とらとら〜ほんうい

丸い穴

粉を〜練別よ入ま

まづうでい

少んど細よ味づか

便氏と

花屋の桶をあそび

け水りも上品と系

洞の魚もろ

玉乃光 〇五十三

燗けむふ〜

今いまおと見みては〜

遠とほく鏡かがみは〜

池いけ田の安やすいよを

毛けが〜

細こまの中なか〜

春はる書かきの京みやこ乃の所ところ受うけ〜

之これのゆ〜

いほ〜

ふ〜

陰かげも〜

〜

小こ〜

〜

各おのの〜

於おの〜

公こう母ぼ研けん〜

〜

〜

柵さくを〜

む乃光

五廿四



づら割く

ごうごうきふくふくごうごう

不自由

鳴る耳がけらうんげい

煉のうらみあきい

みろくろ

水入のり詠そゆき

それですけりあきあこ

ふしかがう

小刺る雨そり

かきくさ

きつとつどやをど智

えの厚へ多しき

二子よ別

鳴る脊中さきさき

高き坂で待くわ

和渡のゆうが遠いすん

禪がう

花車を取らう角がき

空へ

是が勝手でござらん  
矢の之を思を度け

サアアア〜ガ〜め  
玉風十面

ウゲ〜水機娘が〜  
うやうや

金器種〜  
巾之竹時〜

お吸〜け〜  
緋ハ〜

若さふあ

片木々両方〜  
〜投〜

是〜世界

一本〜  
水〜

これ〜極楽

〜  
〜

〜  
〜

流し穴を船 ふう

是く極系

持くしめぬを流す

極又上

切膠了、直るまうてをい

流るんよふ

肩へ使くる

是くあは

呑まうやうをいふ

こころも取まへん

け川水を呑むらん

芥切ぎ

級ごうらふしとまふ

らくた

蛇の池四つ橋が

新呪魚針後減

これぞ仕立

印の松と船をいま

子らんをぬき通す

へんまをさうら向

つらつら喰べんとや  
お汁が二ツは飯エツ  
くさくさ着るも入るるを

子素繁よ

かたぬ乃室の蜂が飛

地灯ぶら

手の鳴り二階交氣どう

をぬる

お蝶はもくもくのいさへ

らんどうのまじりこふんどう

換地

奇人でも又うが下り

おいご出ういごいごん

お尻がうらうらと熱い

通

あの子々何あま子じわら

おは橋節あううあ

相手がけ

控一疋あよむき

まんざら素汚くもへん

誤入

知ビイ〜の音もあ

あ〜とまね

多取ぐら〜仕〜ま〜

桑の仙人か〜ま〜

人面瘡よ〜こ〜

足〜も〜

け溜を〜や〜

中〜ま〜の〜

字〜讀んで〜

〜銀を〜

大〜を〜

宿

喉の〜

信〜と〜

朝の〜

石の中〜

あ〜と〜

〜と〜

風を〜

五

玉乃光  
〇六

後々録うて録斗から  
年時ふら後がうぬめら  
確莫二投ハ何のさは

あまの  
あまの

床凡の穴を狗ふさね

あまの  
あまの

大さ掃為一人やあら  
八百屋がばらさるる

あまの  
あまの

あまの  
あまの

ひさし之よ生捕るま

あまの  
あまの

園両の宿者おる

将之屋の庭酒とさい

澄が梅乃交かとも

あまの  
あまの

昆布屋の店乃茶を

茶うけを梅くわゆを

あまの  
あまの

梅をけしけわるる

玉乃光  
〇六

辨名

七十五里も一トまきけ  
了程の柄で越ゆ  
かろんのゆ馬がら

はらへ

お返りなまきり  
くまの形ぬり

きん

お返りなまきり  
中成とまきり

はらへ

山吹をよむ  
一本

下村で係地

之由

うめぬさ

小中らの人

はらへ

言葉の清ぬ  
層いお蔵

玉乃院

〇六十一

三文で  
青面金剛抄れ遠し  
角のつらも石選て取  
浪花の矢橋志加えの系  
船舞系うい乃と思け

まろく

澄もろくろむて  
豆抄くろくろくろ  
りふろくろくろくろ  
庚申さるくろくろ

仰山

遊者か人が風を  
又てまきやふ吹く  
まきやふ吹くまき  
まきやふ吹くまき  
押入乃垢氣か  
まきやふ吹く  
まきやふ吹く  
まきやふ吹く  
まきやふ吹く

まきやふ吹く

まきやふ吹く



三ノノ  
〇六十二

美理

帳をすたすたさん同會

金右島

紐もあつたしやない

つゝをあてて

そんであつた何乃通

氣

度もさうんしや

之のや女を

ぜんざい縁を

席命頂

はニア

出の風吹

記

増井

氣

本

八天

水

水ハ

氣味のよい

そんがなうまおつ香

うらも呪いおはふ

きんりや

儲てくると山てし

中うだける教そえせ

小風で

汗ぬりふたの

氣がほ

あつてもせういふるも

おのま乃身く入るや

ふちあまやいどぬ

お茶漬お茶漬で

茶がつ

チイよ男ハるん

ゆき

癒てもけまめハ

おけうねたの

ゆき

アノ大工さん

手入まをねる火よふね  
ふもく 袋く 獨をうけ  
去来のまをまらるる

めをむけて

田鼓とまけまをゆる  
風をちりふせむこえ  
あけまをゆるるる  
かきまをゆるるる

眼をこまら

りまをゆるるる

これまをゆるるる  
左まのゆるるる  
毒性まをゆるるる  
ほまのゆるるる

めをこまら

遠慮のまをゆるるる  
又曲水まをゆるるる

目をこまら

あまの二り月をゆるる  
鬼尾まをゆるる

鬼乃尾

〇六十五

るるづ

飯粒のせと船流ま

吸けよおぐくきんれ

給しの上子よ美海交

かめいじやあいらんや

あつと下結ふ板を跨

水をけ

名のある筆をりよあて

龜の脊中くもを合

芝よ彦げてやうら

所より

月の蒼い蚊帳壁よ掛

法向が嶽を並居

この拍子

名をどのき後つまら

味をけ

柱いぶ道ふき

きこたの船を身入傳

志やぐさ

本魚けの家

見乃七

〇六十六

喉をわすはむとよき  
麦飯喰ふりや  
垢ハるもあらはれ

志やなかり

健のくしけへ  
揖取くそくも喰い

福投うらま

えびらら之乃まら

門でオウイが長

えんのみまはり

新なり

おんまらばら長

さみせんが酒

志やなかり

岩まらばら

在等らんか

景瓶みらま

深ゆ

はらけしや

さそとつてふ

○た

思夢も入らまよ

買上るふ存さんどや

きこふれはがらうん

それ破若くは出せ

しんがら

泣けたるもなまじ

三角の海がすゝぬらひ

なんであはれまじ

まじ

あはれまじ

ちしころもあはれ

仕イをいす

又ししもまじ

折んでるもあはれ

あはれ

四海足舞板位の花

小ゆい角がらうん

そんふらうん

四若八袋

あはれまじ

笑根人ハ皇はがつり

おんかき

らんざれ解あしめりま

びくろ乃はが越をうへ

なまけりあれつるうら

編息あかりとい

十のしほ

あしはくは伏又経

火入植さきハ枯

鳴こふきくよ吹はけ

あつり

らんや正年がもせやん

あつり

子ねぐしあつりあつり

これがまのれをさ

あつり

らん乃神ころあつり

あつり

あつりあつりあつり

らんぞはくんで食さつり

よき出来  
の出来

どつとん 足徳をせむとて  
よき出来 なるはてがまひ  
むらん 心徳をせむとて  
折々の本 書よき

我どや

笑もこころ へ付ケともや  
智がそのまふ 徳をせむ  
顔のこころ へ付ケともや  
らん 心徳をせむとて  
得て 徳をせむ

漆が せむとて けしむ

わが 何ん

巴の 紋乃 銀が 元け  
舞の 福徳を せむとて  
近所の 志を せむとて

美しき なる

ア、社 社の 解ゆ 志  
足り 志を せむとて  
えん 心徳を せむとて  
あが 心徳を せむとて

七十一



玉乃光

いざな

東海ちいでハ猫も鳴く

茶の毫で蛇が舞

猿球人よ驚かす

いざな

晴止がさるるところ

そんそく傘をきてつふ

いざな

てア何ろふか王将子一舟

おは笑ハてしじ倍およん

いざな

細をくけども縁をゆき

杉原えんの根をぬるま

通のつ煙管が揺るゆけ

いざな

いづるをさアいよなれ

石とう縁とを能ウコレイ

材本仲仕 天物風

いざな

はぐろも投しこころ

玉乃光 〇七十一

大道門をよぬ〜

〜

替りよけぬ〜

吸がは溜りのふら〜

是より脊伸ち命せんぞ

鏡くち〜と〜

お根よ〜

〜

願〜

と一層ん〜

〜

かづ〜

〜

精進のよ〜

〜

枕屋で

移つら〜

刻本四本を〜

枕が〜

ゆけ〜

そいへば  
つゝ列をうしよとせ  
片をうしよあげて  
せんがうよ

か師通さんごうどや  
よまごころのよき  
脊をうしよ

杉の丸を二本  
九十六文をうしよ

長柄のうしよ  
世治しやの

お給仕まはせ  
しつと静りし  
お給仕まはせ

彫り人  
よき山  
世間

おのころよ  
中のうしよ  
外よ

おのころよ  
中  
外

おのころよ  
中  
外



五ノ...

歩あゆみみもも冠かんややらんらんけ  
おお柳りゅうがが佛ぶつさんさんああままりり

系けい...

塩しほ菜なりり〜〜松しょう松しょう

〜〜表ひょう〜〜杖じょうをを向むかへへ

都みやこでで月つき代しろ〜〜りり〜〜

新あたらしし〜〜〜〜船ふね〜〜也や

*[Faint handwritten text]*

戲坊げぼう芦笛あしふえ選せん

冠かん吟ぎん玉ぎよ乃の光こう

初編しよへん  
全壹冊ぜんいつさく  
出来でき

同

貳編じふへん 三編さんへん

近ちか〜〜近ちか利り

右みぎハハ流りゅう乃の句く新あたら撰せん小こ〜〜當あ年ねん上じやうり  
妻つま秋あき式しき交まじりり通とほ滞どりり出で板いた〜〜〜〜賣う  
出で〜〜中ちゆう乃の求もとめめ流りゅう乃の小こ乃の中ちゆう乃の編へん〜〜  
車くるま席せき上じやう乃の小こ乃の注しゆ解げ入い新あたら撰せん板いた  
寫しやうもも近ちか〜〜近ちか出で〜〜可か中ちゆう也や

天保十五年甲辰五月吉日

書

林

名田 黒茶屋表書清

名田 大和屋興市郎

系けい 河内屋辰巳郎

入い板いた 河内屋辰巳清

